

言説からみた北海道建築の [創作イメージ]

- 現代建築作品の地域性に関する研究 (2) -

創作イメージ 北海道 現代建築 地域性 言説 関係

正会員 ○関口 聡美\*  
同 山田 深\*\*  
同 佐々木 夕介\*\*\*  
同 丸山 友士\*\*\*

1. 序 建築家が捉える建築の地域性について、前編では、建築家がどのように環境を読み取っているかを [情景] として抽出し、分類・整理した。引き続き本編では、[情景] から誘発された具体的な空間のイメージである [創作イメージ] について分類・整理を行い、[情景] との対応関係をみることで、現代建築作品の地域性の一端を明らかにする。

2. [創作イメージ] [情景] から描き出される建築の [創作イメージ] について、それらがどのような意味内容をもつのかを捉えるために、KJ 法的に分析・検討した (図1, 表2)。その結果 [創作イメージ] は、[情景] に対して対比的に建築を具体化させようとする「合わせる」と、[情景] に含まれるものとしての立場を表現する「合わせる」、そしてそれらを横断し、[情景] を補助・強調する役割を担う「活性化」の3つの側面での大枠と10のカテゴリーで捉えられた。3つの大枠では「合わせる」が比較的多くみられ、建築を [情景] に融合させようとする傾向にあることがわかる。また、[創作イメージ] の10のカテゴリーでは「向き合う」「装飾する」「溶け込む」「うつす」が多くみられた。その内容をみると、「向き合う」は、夕日を楽しめる空間、風景を切り取るフレームなど、建築という媒介を通して人々に [情景] を意識させようとする [創作イメージ] がまとめられている。「装飾する」

は、曇天無色の冬に暖かい色彩を与えるなど、[情景] に建築を存在させることで、建築を含めた新たな環境をつくりだそうとする [創作イメージ] である。また、「溶け込む」は [情景] との視覚的連続を意図する [創作イメージ] であり、形態・素材・ヴォリュームなどの建築を構成する各部分を [情景] に合わせ、視覚的な融合を図っている。「うつす」は、[情景] との象徴的関係にあるものがまとめられ、例えば、赤煉瓦という [創作イメージ] によって北海道のイメージという [情景] を表徴するものがみられた。

表2 [創作イメージ] の分類

創作イメージ	分ける	活性化	合わせる	拮抗	拒否	向き合う	調和と対比	装飾	つなぐ	溶け込む	重ねる	保存	うつす	合計
サンプル数	116 (42)	113 (41)	153 (56)	23 (8)	21 (8)	50 (18)	16 (6)	27 (10)	22 (8)	26 (10)	15 (5)	23 (8)	50 (18)	273 (100)

表2注 サンプル数の ( ) 内の数字は全体に対するそれぞれの割合をパーセントで表したものである。

3. [情景] と [創作イメージ] の関係 これまでは、建築家の環境に対する受け取り方である [情景] と、そこから引き出された [創作イメージ] についてそれぞれの意味内容を分類・検討してきた。ここでは、[情景] と [創作イメージ] の対応関係について検討することにより (表3, 図2)、本論の目的となる北海道の現代建築の地域性を浮き彫りにする。各 [創作イ

図1 [創作イメージ] の関係図

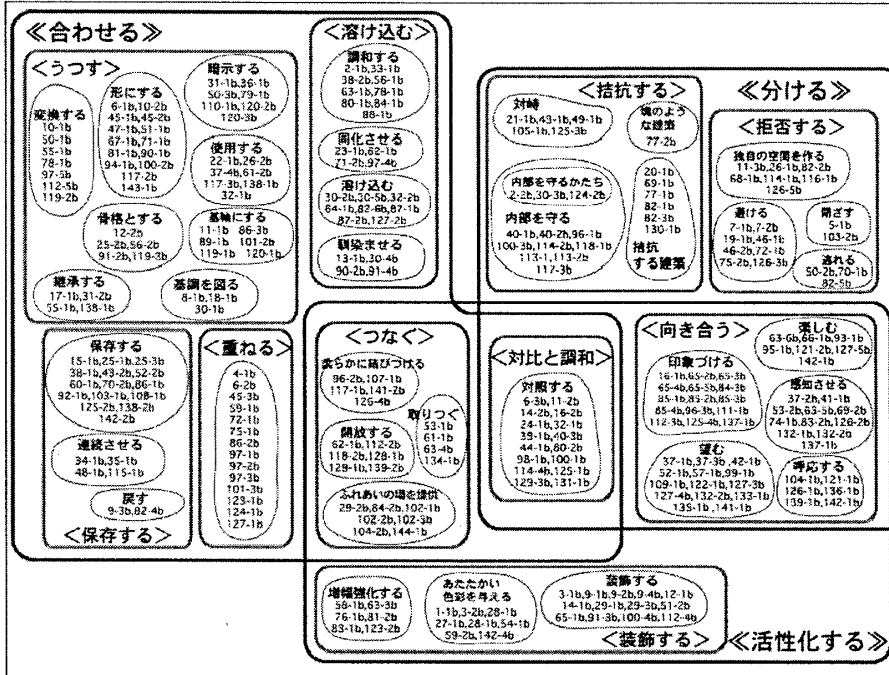


表1 抽出例

No.127 藻岩山麓の家 / 中井仁実  
自然環境と都市景観を併せもつこの敷地の立地条件を活かし、自然光の建築空間への採り込み方、眺望景観と森林風景の切り取り方にこだわりの週末住居のような建物を具現化しようとした。  
<<活性化>>  
<<向き合う>>

No.85 HOTEL P / 伊東豊雄  
ガラスブロックのスクリーンはさまざまな状態の自然光を抽象化し、柔らかな拡散光として遠隔内を満たす。屋外にあるほとんど気づかない微妙な変化が、いったん自然を絶つことにより逆に意識化されることになる。  
<<活性化>>  
<<装飾>>

No.97 ユニ東武ゴルフ倶楽部 黒川雅之  
屋根が風景のスロープと連続してランドスケープの中につながっている。風景に誘導されて生まれた建築のたまたま、ランドスケープに埋没する付属棟。ゴルフ場のための本棟をサポートする施設として風景の中に身を隠そうとしている。  
<<合わせる>>  
<<溶け込む>>

No.12 富良野プリンスホテル / 竹中工務店  
寄国の原型としての3角形の切妻屋根を表現の基本とし、3角形の窓の両端に設けられた…で条件の限りその3角形の純度を高めた。  
<<合わせる>>  
<<うつす>>

A STUDY OF REGIONALITY IN CONTEMPORARY HOKKAIDO ARCHITECTURE (2)

SEKIGUCHI Satomi, YAMADA Shin, SASAKI Yusuke, MARUYAMA Yuji

メージ]に対応する[情景]のサンプル数の割合を示した相関図(図2)から、まずは[創作イメージ]の3つの大枠と[情景]の関係を見ると、《分ける》は〈変化-自然〉(変化-人工)と結びつきやすい傾向がみられる。これは、四季や都市の変貌などといった変化する[情景]に対し、強固な建築や完結した建築をぶつけることで、建築の存在感を高め、建築内部の人間生活の場を守ろうとする関係にあることを示している。《活性化する》に対しては、〈変化-自然〉が強く結びついている傾向が分かる。北海道の様々な自然現象を捉え、建築を通して視覚的に強調や補強を加えることで新しい環境を作り出そうとする意図を読みとることができる。これらに対して、《合わせる》では、北海道の自然を含む〈不変-自然〉や、北海道の歴史・北海道の住宅などの内容を表す〈不変-人工〉といった変化しないものとの強い関係がみられ、[情景]を肯定的に捉え、それに対し建築を融合させようとしている。

以上の各関係をまとめると、北海道の現代建築は、変化する[情景]に対し建築の存在感を強く示すようとする《分ける》と、変化しない[情景]に建築を融合しようとする《合わせる》といった対極的な性格をもつ傾向にあることが分かる。またこのふたつの関係に対し、[情景]と建築の有機的な関係から新たな環境を作り出そうとする《活性化する》という[創作イメージ]も特徴としてみられた。

次に、[情景]と[創作イメージ]の各カテゴリーの関係をみていく。相関図(図2)より、〈拒否する〉は〈変化-人工〉と結びつきが強く、〈向き合う〉は〈変化-自然〉(不変-自然)と、〈うつつ〉は〈不変-人工〉に対して強く関係をもつ傾向がみられる。これらの特徴的な[創作イメージ]に対する[情景]の内訳を図3からみていく。まず〈拒否する〉では、〈変化-人工〉に含まれる“都市の変化”に対し、距離をとる、閉ざすなどといった関係が強くみられる。〈うつつ〉との関係が強い〈不変-人工〉の項目中の“北海道の歴史”に対しては、それらを建築へ取り込み、社会や文化との調和・象徴を意図する傾向が強くあらわれている。〈向き合う〉や〈溶け込む〉と強い関係をもつ〈変化-自然〉(不変-自然)は、これらの[情景]を肯定的に捉え、従属しようとする関係がみられる。特に〈向き合う〉との結びつきが強い〈変化-自然〉に含まれる“一日の光や風”“四季”は、建築内部で過ごす時間が多い北海道の生活の中に、明確な季節・時間の推移を視覚的に取り入れ、生活空間をより豊かにしようとする建築家の意図を読みとることができる。

4. 結 以上、本論では、建築家が意識した環境である[情景]とそこから描き出された空間のイメージである[創作イメージ]を、現代建築の地域性の一端を捉えるひとつの手法として定義し、北海道建築作品を通してそれら进行分析・考察してきた。前編では[情景]についてその内容を掘り、分析した。本編で[創作イメージ]について分類・

表3 [情景]と[創作イメージ]の対応表

創作イメージ	分ける	活性化する	合わせる	情景										合計								
				変化					不変													
				自然					人工													
				春	夏と冬	四季の変化	一日の光や風	都市の変化	その他	大地	風景	山・海・空	自然と都市		北海道の歴史	北海道の住宅	その他					
拒否する	9	2	0	1	0	0	1	1	1	0	1	0	0	0	1	0	2	1	2	23		
向き合う	0	2	0	0	0	0	0	0	6	4	0	1	0	0	0	0	3	1	0	3	21	
溶け込む	0	0	0	3	1	0	8	10	1	1	1	5	2	5	0	6	3	2	1	1	0	50
うつつ	1	2	1	4	0	1	1	1	1	1	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	16	
拒否する	1	1	2	1	0	1	3	2	2	2	3	0	0	1	0	0	6	2	0	1	0	27
向き合う	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	4	0	2	6	1	3	2	1	22
溶け込む	0	1	0	1	0	2	0	1	0	3	3	5	2	3	1	1	2	0	1	0	1	26
うつつ	1	0	1	1	2	0	0	0	0	1	4	1	0	0	1	0	2	0	0	0	0	15
拒否する	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	1	1	1	0	1	3	12	0	1	0	23	
向き合う	4	0	0	2	0	0	0	2	3	3	0	3	2	1	2	3	1	20	0	1	3	50
合計	16	8	5	9	8	2	14	17	17	11	11	17	15	12	6	14	25	44	4	11	7	273

表3(註) 各項目の数字はサンプル数を示す。

図2 [情景]と[創作イメージ]の相関図

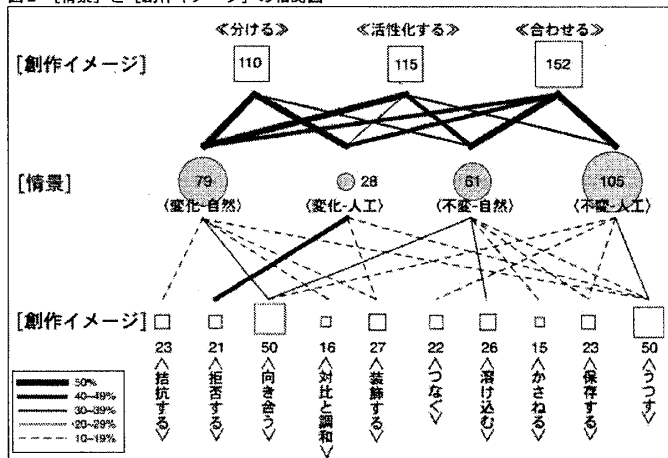


図2(註) 各[創作イメージ]に対応する[情景]のサンプル数の割合が10%以上あるものを線で結んでいる。それぞれの線の太さと対応の関係は図中左下に示す。

図3 特徴的な[創作イメージ]の[情景]に対する内訳

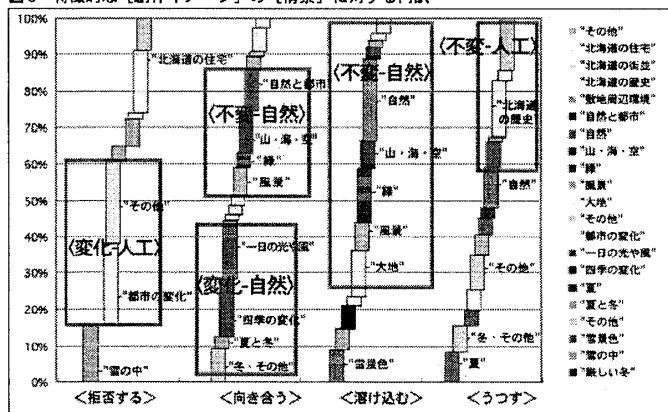


図3(註) 図2でみられた特徴的な[創作イメージ]に対応する[情景]の割合を示した。

整理したところ、全体は《分ける》《活性化する》《合わせる》という3つの大枠と10のカテゴリーで分類された。また、本論の目的となる北海道建築の地域性を示す[情景]と[創作イメージ]の対応関係をみたと、いくつかの特徴的な結びつきがみられ、それらに対する[情景]の内訳を分析し、いくつかの傾向もみることができた。

註1) 本稿では前編と同じ資料を扱っている。

\* 関口建築設計工房  
 \*\* 室蘭工業大学建設システム工学科講師  
 \*\*\* 室蘭工業大学大学院

\* Sekiguchi Architecture Studio  
 \*\* Lecturer, Dept. of Civil Engineering and Architecture,  
 Faculty of Engineering, Muroran Institute of Technology  
 \*\*\* Graduate school, Muroran Institute of Technology